

NEWSLETTER



日本保健物理学会
JAPAN HEALTH PHYSICS SOCIETY

No. 65 February, 2013

目次

活動報告	2
学友会：第6回日本保健物理学会学生発表会の報告	2
若手研究会：「第6回放射線防護体系の進展に関する OECD/NEA アジア会議」に参加して	3
若手研究会：「千葉市科学フェスタ 2012」に参加して	5
専門研究会：「体外計測に関する標準計測法の策定に関する専門研究会」活動報告	6
広報担当からの報告	6
国際対応委員会	7
活動報告	7
放射線防護標準化委員会	8
第38回幹事会	8
第39回幹事会	8
第40回幹事会	9
大学等教員協議会	10
第46回研究発表会に向けて	10
委員会議事録	11
平成24年度 第2回企画委員会議事録	11
平成24年度 第3回企画委員会議事録	12
平成24年度 第3回編集委員会議事録	13
学会掲示板	15
「第3回放射線防護における科学と価値に関するワークショップ」及び 「第6回放射線防護体系の進展に関するアジア会議」に参加して	15
行事予定	16
編集後記	20

活動報告

学友会：第6回日本保健物理学会学生発表会の報告

平成24年12月20、21日に、名古屋大学東山キャンパスで第6回日本保健物理学会学生発表会が開催されました。学生による発表が27件、基調講演1件、企業による講演2件に加え、若手研究会の方々とのグループディスカッション、各研究室のポスター展示と様々な企画が、多くの方々のご協力の下、無事進められました。

学生発表に関しては、学生の参加者は、東京大学5名、群馬大学1名、名古屋大学17名、新潟大学3名、神戸大学2名、九州大学2名、琉球大学1名の計31名で、9つのセッションに分けて口頭発表（発表10分、質疑応答5分）が行われました。

基調講演では、藤田保健衛生大学の横山須美先生から「ICRP 水晶体線量限度に関する課題について」という題目で、ご講演くださいました。企業講演では、東京電力株式会社の平純一様、日本原燃株式会社の岡光昭様、久保一樹様をお招きし、企業概要や研究及び業務内容の紹介をしていただきました。若手研究会からは、独立行政法人日本原子力研究開発機構の河野恭彦様、財団法人電力中央研究所の荻野晴之様をお招きし、「暮らしの放射線 Q&A の最適な回答内容について考える」というテーマで、グループディスカッションを行いました。

自身の研究分野と異なる分野に携わる人への発表経験、異なる分野の研究への質問は普段の研究生活で体験しにくいものである。口頭発表、基調講演、企業講演では十分に議論が行われ、グループディスカッションでは、全員が自身の意見を述べ、お互いに意見を交換することが出来、密度の濃い発表会になったと思います。今後も、学友会の会員同士のみならず、社会人の方との交流を深め、より一層活発に活動していきたいと思います。最後に、学生発表会にご協力して下さったすべての方々へ深く感謝申し上げます。

(学友会会長 名古屋大 廣内 淳)



参加者による集合写真

若手研究会：「第6回放射線防護体系の進展に関する OECD/NEA アジア会議」に参加して

平成24年11月6日から3日間、経済協力開発機構／原子力機関（OECD/NEA）の主催する「第6回放射線防護体系の進展に関するアジア会議」が東京大学の山上会館で開催された。「第3回放射線防護における科学と価値に関するワークショップ」との併催であった。本会合の目的は、「放射線防護体系の進展に向けて、科学と価値に焦点を当てること」、「アジア地域の専門家や若手研究者の考えを聞き入れること」とされた。

筆者（荻野）は、OECD/NEAの放射線防護・公衆衛生委員会（CRPPH）のビューローである酒井一夫氏（放射線医学総合研究所）の推薦を受け、初日の全体会合セッション「福島事故の結果および管理へアジア地域における科学と価値の問題」で約20分間発表を行った。2009年9月に開催された第5回アジア会議では、山外功太郎氏（原子力機構）が若手研究会を代表し、技術者の視点から、若手の確保と育成を図るためには数多くの経験を有する先人の知恵を継承し責任を有する経験を多く積むことが重要であると指摘した。

2011年3月11日に発生した東京電力福島第一原子力発電所事故は、チェルノブイリ事故やJCO臨界事故を過去の教訓として学んできた若手にとって、現在進行形で直面する衝撃的な大事故であった。同時に、自分たちの専門性をいかに社会に還元することができるか、自問自答の日々が続いた。震災から2週間後の3月25日、日本保健物理学会の下道國氏（藤田保健衛生大学）が中心となり、専門家が答える「暮らしの放射線Q&A」サイト（<http://radi-info.com/>）が発足した。そして、8月24日、若手研究者や大学生を中心に構成された「暮らしの放射線Q&A活動委員会」が正式に学会に発足し、リタイアされた諸先輩方と若手が協力する形で今日まで同活動が継承されてきた。第13回国際放射線防護学会（IRPA13）においても、若手研究会の河野恭彦氏（原子力機構）が約1年間のQ&A活動の経験について発表した。若手研究者にとって、Q&A活動委員会に継承されてからの経験は、まさに第5回アジア会議で山外氏が指摘した責任と経験の実践の場と言える。

OECD/NEA会合の発表で、筆者は、暮らしの放射線Q&A活動の概要を紹介した後、本会合における放射線防護の進展に関連したテーマである“Where do we go from here?”を踏まえ、今後の検討課題を二つほど例示した。以下に簡単に紹介する。

一つめは、「ゼロリスク志向にどう向き合うか」という課題である。自然放射線レベルと比較して些少な被ばく線量だったとは言え、福島事故による被ばくはそもそも不要な被ばくであるため、過去を振り返った後ろ向きの意味付けにはどうしても限界がある。発がんの要因は放射線に限った話ではない。そこで、従前の「線量評価手法」から「総合的リスク評価手法」へのシフトについて、解決方法の一つとして触れた。将来に向けて何に気をつけて生活していけばよいのか、極論すれば、過去の不要な被ばくをいかに帳消しできるか、そのような前向きな姿勢が必要なのではないか、と指摘した。

二つめは、「事故後の緊急時にもノミナルな概念を子どもに適用して良いのか」という課題である。ノミナル（名目）とは、個人でなく、性別と年齢を平均した仮想の集団を防護の対象とする考え方である。ICRP2007年勧告の防護体系では、計画被ばく状況の線量限度や、緊急時及び現存被ばく状況の参考レベルは、子どもと大人を区別せずに与えられている。しかし、同時に、ICRPは、緊急時被ばく状況では妊娠中の女性や子どもに対して特別な注意を払うように、また、小児期早期の被ばく後のリスクは最大でも集団全体のリスクのおよそ3倍と仮定することが慎重と勧告している。「集団」と「個人」を放射線からどのように防護するべきか、という問題に対し、筆者は本会合の発表で、若手研究会内での議論をもとに、倫理（Ethics）、価値（Values）、原理（Principles）、

規準 (Criteria) という一連の諸概念の流れを整理した上で、この問題を取り扱う必要があるのではないか、と指摘した。例えば、子どもが最も価値のある存在であるという価値判断が行われるような場合には、下位にある原理が変わり、子どもに特化した規準が導かれることになる。

会合3日目の全体セッションにおいても、このノミナルな概念の子どもへの適用に関して大きな議論となった。フロアからは、何歳までを子どもと定義するのか、男女差はどうするのか、子ども以外の放射線高感受性の集団を特別に防護する必要はないのか、など様々な意見が出された。統一した国際的な見解が与えられることはなかったが、子どもの特別な防護のあり方が今後の放射線防護における重要な議論の一つとなると感じられた。



全体セッションの様子

最終日の全体セッションで報告された本会合の議論のまとめ資料はOECD/NEA サイト (<http://www.oecd-nea.org/rp/workshops/tokyo2012/>) から入手できる。また、各セッションの様子は原子力安全研究会サイト (<http://www.nsra.or.jp/safe/nea/index2012.html>) で2013年3月末まで録画配信される予定である。

(若手研究会幹事 電力中研 荻野 晴之)



集合写真

若手研究会：「千葉市科学フェスタ 2012」に参加して

千葉市科学フェスタ 2012（主催：千葉市、千葉市教育委員会、千葉市科学館）が 2012 年 10 月 6 日と 7 日の 2 日間、千葉市科学館子ども交流館アリーナ（千葉県千葉市中央区）で開催された。会場には 55 グループ（昨年より 6 割増加）の団体が科学体験ブースを出展し、両日とも約 7,000 人の市民が参加した。若手研究会と学友会では、昨年に続いて、ブース「放射線(ほうしゃせん)について考えてみよう!」を出展し、GM サーベイメータや NaI シンチレーションサーベイメータを用いた放射線計測や、蛍光塗料とブラックライトを用いた身体除染デモ、暮らしの放射線 Q&A サイトの紹介を行った。フェスタ初日には、31 歳(当時)で市長に就任された熊谷俊人市長(政令指定都市としては歴代最年少)も若手研・学友会ブースを訪れ、「放射線を正しく理解することが重要」とのエールもいただいた。

参加者の主な感想は以下の通り。「三年連続でブース出展に協力してきたが、市民の興味が変わってきている。2010 年はなんとなく訪れる人が多く、2011 年は事故による放射線の健康影響に関する質問が多かったが、今年は少し落ち着いてきた」「放射線や被ばくという言葉が市民に浸透している。小学生の中には、シーベルトは知っているが、メートルは知らないという子までいた。」「今回のブース出展は、日本保健物理学会の暮らしの放射線 Q&A サイトを紹介する良い機会にもなった」

また、来年度ブース出展に向けた代表的な意見は以下の通り。「親子連れが多く、お母さん方が説明を一生懸命聞く姿が印象的。子どもは音の鳴るサーベイメータに興味がある。次回は、子どもがもっと興味を持てるような内容(工作キット、クイズ形式、コンペ等)に変更してはどうか」「別会場で、放射線の健康影響に関する講演会に参加してきたが、市民からは、貯蔵施設をどうするのか、不測の事態にはどう対処するのか、子どもと大人では放射線感受性はどのくらい異なるのか、釣った魚は食べて良いのか、雨にあたっても大丈夫なのかなど、多岐にわたる質問が挙げられていた。放射線に関するブースを出展する際には、説明者側も幅広い知識を持っていることが必要」

(若手研究会幹事 電力中研 荻野 晴之)



1 日目



2 日目

参加メンバー

専門研究会：「体外計測に関する標準計測法の策定に関する専門研究会」活動報告

我が国では、これまで、主として職業被ばくの管理の一環として内部被ばく線量の測定が行われてきたが、東京電力福島第一原子力発電所事故を契機として、福島県内各地の医療機関や市町村の関連施設にホールボディカウンタ（以下、WBC）が設置され、住民等の内部被ばく線量測定が実施されるようになってきた。これに伴い、住民を対象とした内部被ばく線量測定のあり方について一定の考え方を取りまとめる必要性が関係者の間で認識されてきており、日本保健物理学会が先頃取りまとめた「福島第一原子力発電所事故に関する放射線防護上の課題」においても、内部被ばく線量測定、評価方法に関する標準の整備を本学会が取り組むべき課題の一つに掲げている。

このようなことを背景として、「体外計測に関する標準計測法の策定に関する専門研究会」を設置し、主として現存被ばく状況における住民の内部被ばく検査を行うための技術的指針の策定に向けた現状調査と技術的課題の検討を行うこととした。想定される具体的な検討項目は以下のとおりである。

- ① 内部被ばく線量測定装置の区分と要求性能
- ② 点検、校正等を含む維持管理のあり方
- ③ 住民の内部被ばく線量測定を行う際の線量評価の考え方
- ④ 測定結果の記録と説明

本専門研究会の設置は2年間であり、平成24年度は、WBCの現状調査と問題点の把握（上半期）及び技術的指針原案の作成（下半期）、平成25年度は、現場適用時における原案の問題点調査（上半期）及び技術的指針の取りまとめ（下半期）を予定している。

平成24年8月30日に放射線医学総合研究所にて、本専門研究会委員及びオブザーバによる第1回目の会合をもった。会合では、各研究機関やメーカーから、国内にある様々なWBCの仕様や運用状況等について紹介がなされた。また、今後整備する国内標準規格の原案策定の方針や運用現場での課題等について議論が行われた。現在は、国内標準規格の原案の準備を進めているところである。

(主査 放医研 栗原 治)

広報担当からの報告

(1) ウェブサイト「専門家が答える暮らしの放射線Q&A」の質問受付の終了について

福島第一発電所の事故発生後の平成23年3月25日から学会有志により質問受付・回答の活動を開始、同年8月24日からは、有志の活動を「暮らしの放射線Q&A活動委員会」が正式に引き継いで活動を行ってきました。平成25年に入り、質問の数が減少傾向となり、また、以前お寄せいただいたものと類似の質問が目立つようになってきたことから、新規の質問受付を平成25年1月末で終了しました。平成25年2月末までは当サイトの閲覧は可能ですが、それ以降についても学会資産として有効活用可能なよう情報の学会HPへの移行について対応中です。当サイトの運営に当りまして、学会員みなさまのご協力、ご支援、たいへんありがとうございました。

(2) 「専門家が答える暮らしの放射線Q&A」発刊作業状況について

前回のニュースレター（No. 64 September, 2012）にて、下先生、早川先生を中心とする相談役及び若手研究会、学友会メンバー等で構成する「暮らしの放射線Q&A活動委員会」で、11月下旬発刊を目標に現在精力的に

校正等の作業中である旨報告しましたが、1月末時点においても「一般の方々の手にとって頂ける本」を作成するための生みの苦しみの真っ只中に、特に幹事団である伴先生（東京医療保健大学）、河野先生（日本原子力研究開発機構、若手研究会）、荻野先生（電力中央研究所、若手研究会）、下先生（元藤田保健衛生大学）、早川先生（元福井県職員）はいます。発刊まで今しばらく時間を頂きたく、よろしくお祈りします。

(3) 「広報」の新たな活動の検討

「暮らしの放射線Q&A」受付終了後の新たな質問対応や、H24年4月17日に公表した学会提言のうち「広報活動」に関連する項目の具体化について検討していく方針を企画委員会で確認致しました。学会員みなさまからもご意見がございましたら、是非、お寄せ下さい。

(日本原子力発電(株) 谷口和史)

国際対応委員会

活動報告

1. 韓国放射線防護学会 (KARP) 対応

(1) 韓国放射線防護学会年会 (2012年11月28日～30日、済州島) に服部隆利会員 (保健物理学会副会長・国際対応委員会副委員長) を派遣した。同会員は、KARP-JHPS シンポジウムにて、福島事故後に明らかとなった放射線リスクに関連する課題について講演を行った。

(2) KARP 会長等との検討の中で、KARP-JHPS 連携プログラムを、「AOARP 連携プログラム」に移行させることで合意が得られ、11月29日のKARP 理事会にて承認された。

2. AOARP 対応

従来の日韓連携を AOARP 連携に展開するにあたり、第46回学術発表会 (2013年6月24日-25日、千葉) にて AOARP セッションを設けることとなった。これに関連して、AOARP 事務局が進めつつある、加盟各国との調整に協力している。

3. OECD/NEA 対応

第3回放射線防護における科学と価値に関するワークショップ及び第6回放射線防護体系の進展に関するアジア会議 (2012年11月6日～8日、東京。NEA 放射線防護公衆衛生委員会 [CRPPH] 主催、文部科学省および放射線医学総合研究所・共催、原子力規制委員会・協力) の開催にあたり、若手研究会と連携して「アジア地域の科学と価値の課題：若手研究者の視点から」の企画に協力した。また、同会合において「福島事故後の取組み：アジアの視点から」と題した、韓国、マレーシア、ベトナム、ロシアの専門家によるセッションの企画に協力した。

4. JARR (日本放射線研究連合) 対応

JARR は国際放射線研究会議 (ICRR) の開催母体である国際放射線研究連合 (IARR) の構成組織であり、日本保健物理学会、日本放射線影響学会、放射線腫瘍学会、放射線化学会等が加盟している。第15回大会 (2015、京都) を開催するに当たり、酒井国際対応委員会担当理事が日本保健物理学会からの組織委員会委員として参画している。

(放医研 酒井 一夫)

放射線防護標準化委員会

第38回幹事会

1. 日 時 平成24年9月24日(月) 18:00~20:30

2. 場 所 東京大学工学部12号館別館3F会議室

3. 出席者(順不同、敬称略)

小佐古(委員長)、金子、山本(副委員長)、飯本、服部、山本、鈴木、岩井(幹事)、三浦(作業会主査)、今津(事務局)

4. 議事概要

(1) 現存被ばく状況における物品の出入管理について

福島原発事故に起因した環境汚染状況下での物品の出入管理に関して、基準値そのもの、基準値適合の判断方法、管理方法各々に論点がある。現存被ばくの状況を、過酷度を尺度として大・中・小に区分することにより、適切にマネジメントできる可能性があるとの提案があった。今後、検討を継続する目的で、表面汚染作業会を再開することとした。

(2) 作業会の活動進捗について

「線源と廃棄物」、「職業人の公衆の安全」、「加速器の放射化物に関する安全のガイドライン」に関する各作業会の活動進捗状況について、山本(正)主査、服部主査、三浦主査から、報告があり、今後の方針について意見交換した。

+ 「線源と廃棄物」：中間貯蔵施設に関する放射線防護の標準化作業を急ぐべきとの意見があった。

+ 「職業人の公衆の安全」：7月2日および8月2日に作業準備会を開催し、主にICRPの考え方に基づいて論点を整理し、作業会の人選を進めた。第3回目の準備会を9月25日に予定。なお、この標準については、現在は主に通常時を対象としているが、緊急時についても別個に検討すべきとの意見があった。

+ 「加速器の放射化物に関する安全のガイドライン」：作業準備会が8月16日に開催され、作業の進め方、放射化物の安全規制上の課題が抽出され、議論された。

第39回幹事会

1. 日 時 平成24年11月26日(月) 18:00~21:30

2. 場 所 東京大学工学部12号館別館3F会議室

3. 出席者(順不同、敬称略)

小佐古(委員長)、金子、山本(副委員長)、飯本、服部、山本、鈴木、岩井、近江(幹事)、三浦(作業会主査)、今津(事務局)

4. 議事概要

(1) 作業会の活動進捗について

+ 「線源と廃棄物」：山本(正)主査から、第2回の作業会を12月19日に開催する旨の報告があった。

+ 「ICRP2007年勧告国内取入対応作業会」：服部主査から12月25日に作業会を発足させる旨の報告があった。

＋「物品搬出基準作業会」：山本（英）主査から、第6回作業会の討議内容の説明があった。

＋「加速器の放射化物作業会」：三浦主査から作業会幹事会での検討状況について説明があった。

現在、4つの作業会が活動中である。うち、次の2つの作業会のスコープを整理し直し、名称を以下のように変更することとした。

「ICRP2007年勧告国内取入対応作業会」

→「職業人と公衆の安全・ICRP2007年勧告国内取入対応作業会」

「物品搬出基準作業会」

→「放射線防護のシステム・管理システム作業会」

(2) 作業会の設立と運営に関する手順書の作成について

作業会の設立と運営については、放射線防護標準化委員会専門部会運営内規に、「作業会を設けることができる」とのみ記述がある。すでに複数の作業会が並行して活動していることから、簡単な手順書（覚書）を策定し、ある程度統一した運営を目指すことになった。

(3) 緊急時と現存被ばくの定義について

ICRP勧告等には両者の定義が記述されているが、その切替時の考え方に依然として議論が多い。放射線被ばくの様態（標準の構成A.1放射線被ばくの様態で定義するA1.1計画被ばく状況、A1.2緊急被ばく状況、A1.3現存被ばく状況）について、近江幹事が、その考え方を整理することになった。

(4) 環境モニタリングについて

環境モニタリングについて、その目的、方法、現場での役割等について、飯本幹事がその考え方を整理することになった。

(5) 委員交代について

飯塚委員（東芝）の委員辞任に伴い、新委員に「藤原宏伸氏（東芝）」を推薦することを決めた。年内に承認投票を実施する予定。

(6) 第12回放射線防護標準化委員会の開催について

標準化委員会を2月の中旬に開催することにした。作業会活動報告を中心に会を進める。それに先立ち、全委員に対して、12月中旬に電子メールで各作業会の活動の進捗状況を周知することになった。

第40回幹事会

1. 日 時 平成25年1月21日（月） 15:00～18:00

2. 場 所 東京大学工学部12号館別館3F会議室

3. 出席者（順不同、敬称略）

小佐古（委員長）、金子、山本（副委員長）、飯本、服部、山本、鈴木、岩井（幹事）、三浦（委員）、今津（事務局）

4. 議事概要

(1) 作業会の活動進捗について

＋「線源と廃棄物」：山本（正）主査から第2回作業会の報告があった。

＋「ICRP2007年勧告国内取入対応作業会」：服部主査から第1回作業会の報告があった。放射線業務従事者の内部被ばくに係る対応に関連して、記録レベル・調査レベルの運用方法についての議論が紹介された。議論の内容を整理し、標準文書の一部として活用することが提案された。

＋「物品搬出基準作業会」。山本（英）主査から、第7回作業会（1月31日）の予定議題の説明があった。委員長から、以下の例題提案があった。

持出物品管理、福島事故の影響を勘案した免除レベルと管理区域の設定、セシウム汚染への個別対応、自然放射性物質を実験室で取り扱う場合、福島から物品を移動する場合。

検討項目が「線源と廃棄物」作業会の内容と深く関連するので、双方の連携を強化することになった。

＋「加速器の放射化物作業会」：飯本幹事からの第2回作業会の報告があった。放射化物の管理の見方には、人側からの視点と、線源側からの視点の2通りあるが、両方のバランスをとった記述にすべきとの意見があった。検討項目が「線源と廃棄物」作業会の内容と深く関連するので、双方の連携を強化することになった。

(2) 第12回放射線防護標準化委員会の議題について

以下の議題が決定された。

＋標準化委員会の活動概要報告

①標準の新構成

②重要な概念の解説書

③作業会の活動報告

「廃棄物作業会」

「職業人と公衆の安全・ICRP2007年勧告国内取入対応作業会」

「放射線防護のシステム・管理システム作業会」

「加速器の放射化物作業会」

＋標準の利用、公表について

(3) 福島第2プロジェクトにおける「標準」に関するシンポジウム開催について

執行理事会からの指示と提案を待つことになった。

(東京大 飯本 武志)

大学等教員協議会

第46回研究発表会に向けて

保健物理に関わる人材を継続的に育成していくために、関連する大学がそれぞれの教育内容の充実を図るとともに、大学間で教育、担当教員および設備に関する情報を共有する目的で大学等教員協議会が活動しています。2011年10月に水戸で開催された第44回研究発表会の大学等教員協議会の会合で、大学等教員協議会には保健物理学会会員であればどなたでも参加できることが申し合わされました。これは社会人で学位取得に関心のある方も想定して、現に大学に在籍している方だけでなく、門戸を広くして、多くの方々に大学等教員協議会に参加

していただくという趣旨です。このような経緯で、いまや本協議会は大学等の教員だけの会ではなく、本学会としての人材育成の取り組みを担う会ですので、本年6月千葉で開催される第46回研究発表会では是非大勢の方に大学等教員協議会の会合に参加し連携を深めていただくことを期待しています。

(担当理事 細野 眞)

委員会議事録

平成24年度 第2回企画委員会 議事録

日時：平成24年11月16日(金) 13:00~16:00

場所：日本原子力研究開発機構 東京事務所第3会議室

出席：百瀬(委員長)、伴(副委員長)、谷口、林、飯塚、伊知地、遠藤(幹事)

【議題】

1. 平成24年度第1回企画委員会議事録確認
2. 理事会報告
3. 平成24年度企画行事の検討
4. 平成24年度専門研究会活動状況
5. 広報の進め方について
6. 若手研報告
7. その他

【議事】

主な議事は以下のとおり

- ・平成24年度企画行事の検討

平成24年度の企画行事についてシンポジウム等を検討した。

- ・平成24年度専門研究会の活動状況

「体外計測に関する標準計測法の策定に関する専門研究会」の活動内容について紹介された。

- ・広報の進め方について

Q&A サイトについて、一般の方の疑問に答えてきてその役割は終わったと考え、今年度までの対応とする。

- ・若手研報告

OECD/NEA 会合等若手研の活動状況について紹介された。

- ・その他の活動状況

ラドン専門研究会報告書については企画委員会として了承した。

次回の会合は1月初旬~中旬に開催予定とした。詳細は別途調整する。

平成 24 年度 第 3 回企画委員会 議事録

日時：平成 25 年 1 月 15 日(火) 13:30～16:20

場所：電力中央研究所 第 5 会議室

出席：百瀬(委員長)、伴(副委員長)、林、飯塚、川浦、小嶋、南、山崎、伊知地、平尾、遠藤(幹事)

【議題】

1. 平成 24 年度第 2 回企画委員会議事録確認
2. 理事会報告
3. 平成 24 年度企画行事の検討
4. 平成 25 年度専門研究会の応募状況
5. 広報の進め方について
6. 若手研報告
7. その他

【議事】

主な議事は以下のとおり

- ・平成 24 年度企画行事の検討
- 3 月末までに福島事故に関連するシンポジウムを開催する。テーマは復旧・復興作業者の放射線防護対策、環境動態の現状と課題などのテーマから適切なものを選定する。
- ・平成 25 年度専門研究会の応募状況

平成 25 年度専門研究会に応募された以下の 2 件について議論した。

- ①水晶体の線量測定と評価に関する専門研究会
- ②放射線教育支援ネットワーク構築専門研究会

- ・広報の進め方について

Q&A サイトについては 1 月末で質問の受付を終了予定。これまでの Q&A は学会 HP で閲覧できるように調整を行う。

Q&A 集の出版については原稿の修正を行い、年度末を目途に出版を目指している。

- ・若手研報告

伊達市の除染活動見学など今後の活動について紹介された。

- ・その他の活動状況

平成 24 年度保物セミナーのプログラムについて紹介された。

次回の企画委員会は 3 月とする。日程については別途調整する。

(原子力機構 遠藤 邦明)

平成24年度 第3回編集委員会 議事録

日時：平成24年11月16日(金) 13:30～16:50

場所：電力中央研究所(東京・大手町) 第5会議室

出席：山口(恭)(委員長)、三枝(幹事)、山口(一)、石森、森泉、杉山、古田、高田、布宮、反町、佐藤、川辺
(以上、委員)、笠原(事務局)

議題

1. 前回議事録の確認
2. NL(ニューズレター)の編集方針について
3. 編集委員の作業分担の確認
4. 企画記事提案とJ to W及び巻頭言に係る確認
5. 各パート進捗状況の確認
6. 47-4、48-1 編集進捗状況、論文審査状況の確認
7. その他

配布資料

資料3-1 平成24年度第2回編集委員会議事録(案)

資料3-2-1 NLに関する今後の方策、改訂案

資料3-2-2 NL改訂案

資料3-3 企画記事などの分担表

資料3-4 J to W及び巻頭言のリスト

資料3-5-1 Aパート進捗状況

資料3-5-2 Bパート進捗状況

資料3-5-3 Cパート進捗状況

資料3-6 47-4号目次予定、論文審査状況

資料3-7 編集スケジュール

資料3-8 学会誌「保健物理」の編集について

参考1-1 委員名簿

参考1-2 委員名簿(連絡先入)

参考2 歴代編集委員

参考3 覚書

参考4 論文査読システムについて

参考5 企画記事提案書式

参考6 投稿細則

参考7 投稿の手引き

参考8 論文査読ガイドライン

議事

1. 前回議事録の確認

平成 24 年度第 2 回編集委員会の議事録（案）を確認し、一部修正の上、承認された。

2. NL の編集方針について

NL に関して会員から頂いた意見について検討した。今後、年 4 回（2、5、8、11 月中旬）発行すること、学会メーリングリスト等にて原稿を随時募集すること、記事の掲載順は、会員からの投稿を中心にして、時系列を考慮して配列することとした。さらに、フォーマットの一部修正を検討するとともに、原稿のチェック体制や、配信方法を見直し、読みやすい誌面を目指すこととした。

3. 編集委員の作業分担の確認

三枝幹事より、依頼記事、J to W、巻頭言の企画、校正と編集後記、及び J-STAGE に関する分担について案が示され、一部修正の上、了承された。

4. 企画記事提案と J to W 及び巻頭言に係る確認

山口委員長より 48-2 号巻頭言の執筆者案が示され、了承された。

5. 各パート進捗状況の確認

企画記事、論文審査の進行状況が各パート幹事より報告された。48-2 号以降の誌面を充実させるため、会議印象記等の話題や、解説記事を依頼することし、執筆者案を検討した。

6. 47-4、48-1 号編集進捗状況、論文審査状況の確認

編集事務局より、同号の編集状況、論文審査状況が報告され、確認した。学会誌印刷費用削減のため、各年 1 号（3 月号）に掲載していた「投稿の手引き」等については、ホームページに掲載中の手引き等への案内及び投稿票のみ掲載し、頁数を削減することとした。

7. その他

松浦委員の後任として、布宮氏を新委員として迎えた。また、来年 3 月に任期満了となる委員の後任候補について検討を開始することとした。

45 回研究発表会からの論文投稿勧誘進捗状況を確認した。

山口委員長より、「専門図書館 No. 256」に「学会誌「保健物理」の編集について」を寄稿したことが報告され、その内容が紹介された。

次回の会合を、平成 25 年 3 月 1 日（金）13 時 30 分から、東京・大手町で開催することとした。

（編集委員会幹事 原子力機構 三枝 純）

学会掲示板

「第3回放射線防護における科学と価値に関するワークショップ」及び「第6回放射線防護体系の進展に関するアジア会議」に参加して

経済協力開発機構／原子力機関 (OECD/NEA) の放射線防護・公衆衛生委員会 (CRPPH) が主催する「第3回放射線防護における科学と価値に関するワークショップ」及び「第6回放射線防護体系の進展に関するアジア会議」が、平成24年11月6日から8日にかけて3日間、東京大学本郷キャンパス山上会館において合同開催された。本会合は、新しい科学と技術開発の統合及び放射線防護上の社会経済的側面も考慮した放射線防護体系の構築に貢献していくため、2008年及び2009年に開催された「放射線防護における科学と価値に関するワークショップ」に続くものである。

本会合の目的は、「放射線防護体系の進展に向けて、科学 (Science) と価値 (Value) に焦点を当てること」、「アジア地域の専門家や若手研究者の考えを聞き入れること」とされた。そして、福島事故の経験を考慮しながら扱うべき3つの重要な論題として、①低線量被ばくと公衆衛生に関する評価および管理、②子どもの防護と自助的活動、③放射線のがん以外の影響、が挙げられた。

1日目の「Plenary session 1」では、酒井一夫氏 (放医研) を座長として、まず斎藤公明氏 (JAEA) から福島事故後の現状報告として、福島原発周辺の汚染状況と除染活動に関する紹介が行われた。次に、Jaiki Lee 氏 (ICRP Main Commission) , Noriah Bt. Mod Ali 氏 (Malaysian Nuclear Agency) , Dang DucNhan (Vietnam Atomic Energy Agency) , Nataliya Shandala 氏 (ICRP Main Commission) の4名により、福島事故後のアジア地域各国 (韓国、マレーシア、ベトナム、ロシア) の放射線防護上の課題について述べた。

お昼休みを挟み、午後は、「Asian Regional and Science and Values Issues」のセッション名で、若手研究者を代表して2名からの発表が行われた。まず若手放射線生物学研究会 (YRBAJ) を代表して、大塚健介氏 (電中研) より、放射線生物学の観点から、福島事故の教訓をもとに、今後低線量/低線量率効果の機構の解明が重要であると述べた。また、報告者も所属する若手研究会を代表して、荻野晴之氏 (電中研) より、暮らしの放射線 Q&A ウェブサイトを用いた活動を通じて、特に子どもを持つ母親からの、子どもの被ばく影響に関する質問の回答例を紹介した上で、子どもの防護と自助的活動に必要な知識を専門家が住民に効果的に提供することが重要であると述べた。本セッションの最後には、丹羽大貴氏 (ICRP Main Commission) から、福島事故後に開催された ICRP ダイアログセミナーの概要を振り返りつつ、その中で丹羽氏が小さな子どもを持つ母親と接した経験から、事故後時間とともに、専門家と母親間のコミュニケーション上のギャップは少しずつ埋められてきているものの、まだ完全に埋めきれてはおらず、今後も継続した住民とのリスクコミュニケーションは重要であると述べた。

「Plenary session 2」では、2日目以降の Breakout Discussions の3つのトピック「Topic1. 低線量/低線量率被ばくと公衆の被ばくの評価と管理」、「Topic2. 子どもの防護と自助的活動」、「Topic3. 非がんの影響」、円滑に議論がつけられるよう、各トピックの概要が述べられた。

報告者が1日目の聴講で特に気になったのは、発表間の議論で、とある専門家が「放射線防護の専門家は住民とリスクコミュニケーションするべきではない。心理学的専門家であるカウンセラーが、主にリスクコミュニケ

ーションの対応をすべきなのではないか。」といった意見である。これについて、学会として福島事故後、暮らしの放射線 Q&A 活動を対応してきた 1 人として、住民に対して放射線防護上、最も適切なアドバイスができるのは、我々放射線防護の専門家なのではないかと考える。しかし、ある程度、放射線に対する心理的なストレスが多い住民の方々に対しては、カウンセラーの専門家の協力も必要なかもしれない。これまでの暮らしの放射線 Q&A 活動の実績を振り返ると、非常に多くの住民の方々から感謝の言葉も寄せられてきており、放射線防護の専門家が相手の立場に立って親身になって対応すれば、相手の心に必ず届くのではないだろうか。今後、暮らしの放射線 Q&A ウェブサイトに掲載された質問及び回答をまとめた冊子が発刊されることとなっているが、福島事故直後から今まで約 2 年間の暮らしの放射線 Q&A 活動を通じて得られた経験を多くの方々に発信し、放射線防護の専門家と住民間のリスクコミュニケーションの発展に向けて一助となればと幸いであると報告者は考えている。

(原子力機構 河野 恭彦)

行事予定

第 3 回ホールボディカウンター (WBC) 学術会議ならびに第 1 回福島県ホールボディカウンター (WBC) 研究会

開催日時・場所：平成 25 年 2 月 23 日 (土) 13:00~17:00 (予定)

公益財団法人 福島県労働保健センター 大会議室

(福島県福島市沖高字北貴船 1-2 TEL : 024-554-1133)

内容：

- ・独立行政法人 放射線医学総合研究所 仲野高志 先生による御講演
(題未定：福島県の WBC 校正事業をもとにした実践的な話題を予定)
- ・各測定現場からの検査結果や技術報告などを演題としてご発表いただきます
(演題募集に関しましては別紙を参照ください)
- ・当日、県内 WBC 配置の現状についての資料を配布いたします (事務局調べ)

主催：公立大学法人 福島県立医科大学放射線健康管理学講座

共催：福島医学会、社団法人 福島県放射線技師会、日本放射線安全管理学会、一般社団法人日本保健物理学会、福島県立医科大学放射線災害医療センターおよび放射線医学県民健康管理センター

会場提供、協力：公益財団法人 福島県労働保健センター

※ご参加には事前登録は必要ありません。

※ご意見お問い合わせ等ございましたら、下記メールアドレスにご連絡いただけますと幸いです。

【お問い合わせ・事務局】公立大学法人 福島県立医科大学 放射線健康管理学講座 宮崎

TEL : 024-547-1111 (3750) FAX : 024-549-6080 E-mail : m-miya@fmu.ac.jp

第 34 回「医療放射線の安全利用」フォーラム

主催： 医療放射線防護連絡協議会

日時： 平成 25 年 3 月 1 日（金） 10:00～16:15

場所： タワーホール船堀 5 階「小ホール」（総合区民ホール）

江戸川区船堀 4-1-1（電話：03-5676-2211）

地下鉄・都営新宿線「船堀」駅下車北口（徒歩 1 分）

テーマ： 「福島原発事故から医療被ばくを考える」

趣旨： 福島第一原発の事故から 2 年近く経ても、人々の放射線・放射能に対する不安と混乱は継続し、放射線被ばくに対して強い不安と懸念が増長しています。医療で用いる放射線は、患者に便益があることが前提条件で、医療関係者は患者の便益を保障する責務があります。今回は、福島原発事故に関連した低線量の健康影響の UNSCEAR 報告、福島原発事故の経験から医療で受ける放射線被ばくに対しての医療放射線安全と医療被ばくについて皆様と一緒に考えます。

（プログラム）

10:00～10:10 あいさつ 佐々木康人（医療放射線防護連絡協議会会長）

10:10～12:00

第 I 部 基調講演 1（講演時間各 40 分）

1. 「国連科学委員会 UNSCEAR の役割と福島原発事故健康リスク調査中間報告」

佐々木康人（UNSCEAR・元議長、当協議会会長）

2. 「胎児・こどもの放射線影響と医療被ばく」

島田義也（放射線医学総合研究所）

13:00～16:00

第 II 部 パネルディスカッション

テーマ：福島原発事故から医療放射線安全と医療被ばくを考える

1. 座長講演「福島原発事故の対応から今後の医療放射線安全」（講演時間 30 分）

菊地 透（自治医科大学）

2. 話題提供：（講演時間各 20 分）

1) 最近の ICRP 勧告からの医療放射線安全を考える

田中淳司（埼玉医科大学）

2) 放射線科医の立場から医療被ばくを考える

大野和子（京都医療科学大学）

3) 診療放射線技師の立場から医療被ばくを考える

粟井一夫（榊原記念病院）

（休憩）10 分

第 III 部 総合討論「今後の医療放射線安全と医療被ばくを考える」（70 分）

指定発言：数名予定

閉会あいさつ 菊地透（医療放射線防護連絡協議会総務理事）

参加費： 3,000 円（講演要旨集代含む）

なお、一般市民の方は無料（但し、事前登録をお願いします）

申込方法： FAX または E-mail でお申し込みください。

申込先： 医療放射線防護連絡協議会事務局

〒113-8941 東京都文京区本駒込 2-28-45 日本アイソトープ協会内

Fax : 03-5978-6434、TEL : 03-5978-6433（月・水・金のみ）、E-mail : jarpm@chive.ocn.ne.jp

第13回「放射線環境・安全」に関する研究会

主催： 特定非営利活動法人 放射線環境・安全カOUNシル (RESC)

話題： 非電離放射線と防護規制について

要旨： 非電離放射線は電離を起こさない電磁波に分類される。低周波から高周波まで広帯域に亘り、静磁場、光まで広げることもある。電磁波は電界と磁界を交互に発生させ、導体には電流を生じるため、過度な生体ばく露は刺激や熱作用を引き起こす。今回は発生源を特定し易い事業所等における電磁環境を念頭に置いて、国際的に検討されている防護規制や安全の考え方を紹介する。

話題提供者： 宇田達彦（放射線環境・安全カOUNシル）

日時： 平成25年3月7日（木）15:00～17:00

場所： （株）アトックス名古屋事務所

名古屋市中区錦2丁目4番3号（錦パークビル7階）

参加資格： 特になし。法人会員以外の多くの方の参加を希望。

ホームページ： 放射線環境・安全カOUNシルの URL (<http://www.res-council.jp/index.html>)

問合せ先： 飯田孝夫 (e-mail : takao-h-iida@mediacat.ne.jp)

第2回アジア放射線研究会議 2nd Asian Congress of Radiation Research (ACRR)

場所： 中国北京

日時： 2013年5月10-13日

重要な日程：

Registration Open November 20, 2012

Abstract Submission December 1, 2012

Abstract deadline: February 28, 2013

ホームページ： <http://www.acrr2013.org>

自然起源放射性物質 (NORM)に関する国際シンポジウム

場所： 中国北京

日時： 2013年4月22-26日

趣旨： このシンポジウムは、IAEA が関係または協力して、第1回は1997年にアムステルダムで開催され、最

近では2007年に第6回としてモロッコで開催されています。NORMの問題は、世界中の問題となりつつあり、今回は第7回としてアジアで初めての開催で、NORMに関する幅広いテーマについて、世界中の研究者や関係者が参加する予定です。

ホームページ：www.norm7.org

第21回原子力工学国際会議(ICONE-21)

主催：中国原子力学会、日本機械学会(JSME)、米国機械学会(ASME)

日時：2013年7月29日～8月2日

場所：中国成都

趣旨：本国際会議は、毎年開催されるものですが、今回ICONE21のTRACK4では、初めてRadiation Protectionに係る内容が取り扱われることになり、Radioprotection and Nuclear Technology Applications に関する論文を募集しておりますので、お知らせ致します。

ホームページ：<http://www.asmeconferences.org/icone21/>

問合せ先：第21回原子力工学国際会議(ICONE-21)TRACK4 リーダー 服部隆利（電力中央研究所）

11th International Conference on the Health Effects of Incorporated Radionuclides (HEIR 13)

場所：the Claremont Hotel in Berkeley, California, USA

日時：2013年10月13日～17日

重要な日程：

March 1, 2013 - Opening of abstract submission & registration

May 1, 2013 - Abstract submission deadline (oral & poster)

June 1, 2013 - Acceptance notification

June 15, 2013 - Early registration deadline

October 31, 2013 - Submission of manuscripts deadline

ホームページ：<http://actinide.lbl.gov/HEIR2013/>

7th International Symposium on Radiation Safety and Detection Technology (ISORD-7)

場所：中国

日時：2013年7月

重要な日程：Deadlines

Website registration: 31 May, 2013

Website submission of abstracts: 31 May, 2013

Website submission of full papers: 31 Aug, 2013

ホームページ：<http://www.isord-7.org>

編集後記

今回より、ニュースレターのデザインを変更しました。さらに内容を充実させるため、会員の皆さまからの投稿を歓迎します。研究会案内や、印象記、時事考察や書評などお待ちしております。投稿は学会メールアドレス (hobutsu@capj.or.jp) までお願いします。

発行・編集：日本保健物理学会編集委員会
担当：反町 篤行（弘前大）、川辺 睦（岡山大）